

成人麻疹3症例の検査所見と合併症

佐藤守彦¹⁾ 新井基洋¹⁾ 入澤ゆかり¹⁾
吉富愛¹⁾ 佃 守²⁾

1) 横浜市立みなと赤十字病院 耳鼻咽喉科

2) 横浜市立大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

【緒言】当科で経験した成人麻疹の3症例と医療関連感染対策につき、昨年度の当研究会で報告した。今回は同一症例における検査所見と合併症につき報告する。

【症例】2007年から2008年にかけての全国的な麻疹流行期に当科で入院した成人麻疹3症例。

【検査所見】3症例ともにEIA法麻疹抗体はIgGよりもIgMが高値であった。3症例ともに白血球数は正常値であった。総リンパ球数は低下していた。3症例ともに経過中に異型リンパ球の出現を認めた。2症例で血小板の低下をみとめた。1症例でGOTおよびGPTの上昇をみとめた。2症例でGOTおよびGPTは正常であった。3症例でLDHの上昇を認めた。GOTおよびGPTが正常であった2症例でLDHアイソザイムを測定したが、3型および4型の上昇をみとめた。

【合併症】3症例ともに入院中に下痢をみとめた。1症例でムンプスIgM抗体の上昇をみとめた。1症例で扁桃培養でグラム陰性嫌気性菌のフゾバクテリウムをみとめた。1症例で退院後に喀痰培養でインフルエンザ菌をみとめた。

【考察】3症例ともに麻疹の既往はなく、麻疹ワクチンの接種歴もなかった。麻疹抗体検査からも麻疹初感染と推定された。麻疹初感染ではワクチン不全による修飾麻疹と比較して症状がより重症化しやすいため、全身状態の悪化により入院となったと推定された。野生株麻疹ウイルスはCD150 (SLAM) を受容体として細胞に侵入する。腸管リンパ組織を含む全身のリンパ組織、血小板にウイルスが侵入することでリンパ球数、血小板数の低下をおこし、細胞性免疫機能を低下させることにより、その他の病原体による感染を起こし易くなっていると推定された。